

立花宗茂と閨千代

2021年1月13日

我部山 民樹

1. はじめに

柳川（福岡県）では「立花宗茂と閨千代」の物語をNHKの大河ドラマに招致する運動がさかんに行われているようだ。

「西国一の強者」と言われ、関ヶ原の戦いで敗将となりながら、唯一旧領の城主に返り咲いた「立花宗茂」（たちばなむねしげ）と女城主として知られる妻の「立花閨千代」（たちばなぎんちよ）は切り離して話すことは出来ない。

○立花閨千代

閨千代は名将たちが認めた希代の女武将であり、女城主として歴史家の間でよく知られている。女城主として文書（大友宗麟が発給した文書）で残っているのは閨千代だけといわれている。

立花閨千代は大友氏の有力家臣（加判衆）であった戸次鑑連（べっきあきつら、立花道雪）の一人娘として筑後国山本郡（現・福岡県久留米市）の間本（といもと）城にて誕生。「閨」の字は「慎み、人の話を聞く」という意味合いを込めて名づけられた。

1575年5月28日、閨千代7歳の時に立花城の城督・城領・諸道具の一切を父・道雪より譲られた。大友家の許しを得たうえで閨千代が立花城の城督（任国において領主の代わりに政を行う、土地の所有権は無いが軍事権はある）となる。

やがて閨千代は大友氏家臣・高橋紹運（たかはしじょううん）の長男・宗茂と結婚する。道雪が「ぜひ」と紹雲を口説き落として婿入りしたのだ。

西国一の美姫と言われ、幼少期から聡明で快活、配下の者を思いやる情も持ち合わせていたとされている

柳川の「三柱神社」（みはしらじんじゃ）は立花宗茂、戸次鑑連（べっきあきつら、閨千代の父親）そして立花閨千代の3人を祀ることから、その名がついたそうだ。

○立花宗茂

立花宗茂は1567年8月18日、豊後（大分県）に大友氏の重臣・吉弘鎮理（のちの高橋紹運）の長男として生まれたとされる。父が高橋氏の名跡を継いだため、高橋氏の跡取りとして育てられ、元服後は高橋統虎（むねとら）と名乗る。

1581年8月、男児の無かった大友氏の重臣・戸次鑑連（道雪）が宗茂を養嗣子として迎えたいと希望してきた。最初は拒絶しようとしていたが、道雪が何度も請うてきたため拒絶できず、宗茂を養子として出した。道雪の娘・閨千代と結婚して婿養子となり、名も戸次統虎と改め、閨千代に代わって道雪から家督を譲られた。

高橋紹運は大友家の家臣・戸次鑑連の補佐役で、戸次鑑連の雷神に対して風神と呼ばれた猛将で、岩屋城の戦いで玉砕。

立花宗茂と闇千代に関する主な出来事

1567年8月18日	大友氏の重臣・高橋紹運の長男として誕生。
1568年	1569年8月13日、闇千代が大友家の宿将・戸次鑑連（べっきあきつら、立花道雪）の一人娘として誕生する。
1575年	大友家の許しを得て、闇千代が立花城の城督になる。
1581年	高橋紹運（大友宗麟の宿老・吉弘鑑理の次子）の長男である宗茂を道雪の婿養子に迎えた。
1582年	宗茂、立花姓を名乗る。（たちばなむねしげ）
1585年月	戸次鑑連が病死
1586年7月	薩摩より島津忠長・伊集院忠親が率いる約5万の島津軍が筑前国・大友領に侵攻。実父・高橋紹運は前線・岩屋城で1,000名弱の兵士とともに迎撃する。宗茂も遊撃戦術で島津本陣への奇襲を成功させるが、半月後に岩屋城が陥落。高橋紹運は自害し、兵士は全員討ち死。 宗茂は立花山城で徹底抗戦、島津軍の奇襲に成功する。8月24日、島津軍を追撃し、岩屋城と宝満城を奪還する武功を挙げる。
1587年	宗茂、肥後国の大規模な国人一揆が発生するが鎮圧する。九州の平定に活躍し、秀吉に筑後柳河（柳川）を拝領する。大友家が弱体化し改易されたことにより大名として独立し、秀吉の直臣となる。19歳にして13万2,000石の柳川城主になる。 9月、佐々成政の移封後の肥後国で大規模な国人一揆が発生。成政を援護するために出陣。一揆軍を総崩れにする。この時、「火車懸」という高度な戦術を編み出す。
1588年頃	農業用水を確保するために矢部川を分流し、半人工運河の花宗川の開発に着手。 上洛し、豊臣姓を下賜される
	その後、闇千代は柳河（柳川）城を出て宮永に居を構え、「宮永殿」と呼ばれるようになる。別居は夫婦不和が原因とされている。
1590年	小田原征伐に従軍。秀吉は諸大名の前で「東の本多忠勝、西の立花宗茂、東西無双」と評し、その器量を褒め称えた。

1592 年	文禄の役（朝鮮出兵）に参陣し、獅子奮迅の働きをしたと伝えられている。秀吉からは「日本無双の勇将たるべし」と言われる。
1598 年	慶長の役では安骨浦（あんごるぼう）の警備を命ぜられた。
1600 年	宗茂は関ヶ原の戦いでは京極高次の立て籠る近江大津城攻めにあり、西軍敗戦の知らせを聞くと、海路にて柳川城に入ってくるが、闇千代が従者等を率いて自ら出迎える。柳川城は家臣ともども加藤清正に開け渡される。宗茂は隠棲し、闇千代は加藤清正のもとに身を寄せる。闇千代は寺社詣でをし、「私の命に代えて夫をもう一度世に送り出したまえ」と願をかけ続けたと言い伝えられる。
1602 年 10 月	闇千代 7 月頃より病を患い、10 月に死去。享年 34 歳。
1603 年	宗茂、京や江戸で浪人していたが、家康に求められ 5,000 石の旗本に取り立てられる。 その後、陸奥棚倉藩（むつたなぐらはん）1 万石の大名に復帰
1615 年	大坂夏の陣で將軍秀忠の警護を担当。
1620 年	柳川城主に 10 万 9,200 石余りで返り咲く。柳川城明け渡しから約 20 年後のことである。関ヶ原の戦いの敗将の中で旧領の大名に帰り咲くことのできた唯一の大名である。
1622 年	闇千代の菩提寺「良清寺」を建立
1622 年	宗茂、76 歳で死去。実子に恵まれず、甥が継承する。

柳川城



柳川の川下り



闇千代の逸話

○敵軍と戦った闇千代率いる「女子組」(立花城における)の武勇(引用)

立花城には3千の兵力があったと言われているが、それ以外に闇千代が率いた女子組と呼ばれる武士の妻や侍女で作られた組織がありました。

主は城の留守居役でしたが、実際に敵軍と戦ったこともあったようで、長刀を脇の下に抱え込み、胴丸など具足を付けて馬に乗る姿は壮観だったと伝わります。

特に闇千代は長刀の優れた使い手であっただけでなく、女子用の軽い鉄砲の腕前においても鉄砲組頭も敵わぬほどであったと言います。

○関ヶ原後の闇千代の武勇(引用)

情勢を見つめていた立花闇千代は夫・立花宗茂に東軍につくよう重臣とともに説得しますが、宗茂は豊臣秀吉から受けた恩に忠義を示し、これを拒絶。石田三成を中心とする西軍に加わり、大津城を見事開城させるなど、優れた働きを見せます。

しかし、西軍は完敗し、宗茂は柳川へ逃れ落ちるようになります。その知らせを聞いた闇千代はすぐさま戦いの支度を整えて宗茂の救出に向かい、筑後川のほとりで疲れ切った立花軍を発見すると、無事に柳川まで連れ帰ります。ここからが、闇千代の今に伝わる武勇伝です。

夫を城に送り届けたのち、闇千代は甲冑(鎧兜)を付けて出陣し、海上から来襲した肥前国の鍋島軍を撃退。

さらに開城の説得にやってきた肥後国の加藤清正率いる2万の兵の前に立ちはだかります。

その猛将ぶりが今も語り草になっているが、加藤清正が闇千代の勇々しさを「さすが立花山の女城主」と称え、「自軍の兵をみずから損ねることもあるまい」と迂回路を通過して引き返したと伝わるのです。

○文禄の役留守役（引用）

1592年、夫・宗茂が文禄の役で朝鮮に出陣中、闇千代は秀吉から名護屋城（唐津）に呼び出しを受けます。秀吉の前に進み出た闇千代の出で立ちは鉢巻き・襷（たすき）がけの軍曹で、しかも手には長刀を持っていたと言われていま

す。好色で名高い秀吉を警戒としてのことかと、その真意は定かではありませんが、秀吉は「戦時である。戦支度で馳せ参じたとはい立派な心構え」と褒めるしかなかったと伝わります。

闇千代菩提寺の良清寺（柳川）



宗茂の逸話

○九州征伐の功勞を称え、宗茂は大名に昇格（引用）

秀吉の「九州征伐」の一助となり、西部戦線に参加すると、肥後国ルートで「竹迫城（たかばじょう）」を攻略し、さらに「出水城（いずみじょう）」を守っていた「島津忠辰（しまづただとき）」を倒し、そして「島津忠長（しまづただなが）」と対決して勝利しました。この際、宗茂は島津氏支流の伊集院氏などから人質を取り、反撃できないようにするなど、卒のない動きを見せます。

結果的に島津氏は降伏し、九州征伐は豊臣軍の勝利で幕を閉じました。武勲を立てた宗茂は秀吉より柳川城を根拠地として筑後国柳川13万2,000石を授かります。それだけでなく、大友家より分離・独立した大名として取り立てられたのです。

一介の家臣だった者が、のちに正式に天下人となる秀吉から所領を授かって大名にまで出世することは、当時ではほとんど例にない出来事。それほど宗茂の武勇は優れていたと言えます。

○関ヶ原の戦い（引用）

秀吉が生前「東の本多忠勝、西の立花宗茂」と評していたことを知り、家康は立花宗茂を非常に警戒していました。一説によると、家康は宗茂が西軍に味方しないよう、様々な工作活動を行っていたとされています。

しかし結局、宗茂は西軍に味方しました。家康が「東軍に付いて勝利すれば、法外な恩賞を与える」と約束していたのですが、宗茂は秀吉の恩義を重んじて、その誘いを断ったのです。

宗茂は関ヶ原に向かう前、突如として東軍に寝返った「大津城」の「京極高次」と戦うこととなります。宗茂は敵の夜襲を予見し、さらに宗茂の家臣である「十時連貞（とときつれさだ）」の大活躍により敵将を3人捕縛、内情を吐かせるのに成功しました。

そこで得た情報をもとに、宗茂は城攻めを行います。このとき使用したのが養父・立花道雪の発案した弾丸と薬莢である「早込」。これにより鉄砲の早打ちと連射を可能にした宗茂は、土塁と竹束を用意させて防御を固めた上、敵目掛けて射撃。敵はたまらず、鉄砲狭間（はざま）を閉じてしまいます。これを好機と見た宗茂は三の丸から攻め入り、あっという間に本丸を占拠しました。

しかしながらこの戦いのために、宗茂は関ヶ原の戦いに間に合わなかったのです。関ヶ原の戦いでは西軍が総崩れ、実質的に指揮を執っていた石田三成は敗走してしまうこととなります。その後、宗茂は徹底抗戦を主張。しかし、西軍の総大将「毛利輝元」は動こうとせず、西軍の負けが確定しました。

○浪人へ転落（引用）

領地へ撤退。しかし、そこで待ち受けていたのは「加藤清正」らによる包囲網でした。関ヶ原の戦いののち、ほとんどの武将が徳川方に付き、まわりの大名が徳川の味方になったため、囲まれてしまったのです。

宗茂は柳川にて籠城するも、結果的に敵方の説得に応じ、開城、敗北を喫してしまいます。開城後は、徳川家康の正式な沙汰により改易され、宗茂は浪人へと身をやつすことになりました。

○奇跡の大逆転！宗茂は旧領を回復し大名へ復帰！（引用）

宗茂の力量を知っている加藤清正などが家臣になるように説得するも拒否。

わずかなお供を連れて京に登り、その後は江戸で暮らしていました。しかし、浪人生活から救った人物がいたのです。それは名槍「蜻蛉切（とんぼきり）」の使い手として有名な徳川四天王のひとり本多忠勝。忠勝は宗茂の実力を認めていて、主君である家康に召し抱えるように懇願しました。家康は願いを聞き入れ、幕府の「御書院番頭」（実質的家康の親衛隊長）に抜擢、5,000石を与えています。さらに働きぶりが評価されたのか、その後10,000石が加増され陸奥国棚倉（福島県）に大名として復帰したのです。これだけでも異例ですが、立花宗茂の返り咲きはこれにとどまりません。豊臣家と徳川家の最後の争いである「大坂冬の陣・夏の陣」に参戦した際、宗茂は「豊臣秀頼（とよとみひでより）」の参陣がないことなど、豊臣方の動きをいくつか予言して的中させ、徳川方の勝利に大いに貢献しました。その結果、徳川幕府より旧領柳川10万9,200石を与えられ、本当の意味で大名に返り咲いたのです。

最後に

宗茂も閨千代も多くの逸話が遺されている。閨千代の逸話は「大友文書」や「豊前覚書」に残されているが、逸話を裏付ける資料は少ない。後世の創作もあるのだろうが、多くの逸話が遺されるほどの美貌と武勇を兼ねそろえた人物だったのだろう。一方、宗茂の逸話を裏づける資料は残されている。宗茂は幾多の活躍を秀吉や家康に高く評価された人物だ。是非、NHKの大河ドラマで見たいものだ。配役を想像するだけでもワクワクしてくる。夫婦の別居の原因は不明だが、閨千代が子宝に恵まれなかったので、世継ぎの為に入れた側室が不和の原因だったのではなかろうか？それを閨千代は受け入れられなかったのだろう。

宗茂は3人の妻（側室の人数は不明）がいたが子宝に恵まれなかった。その原因は恐らく宗茂に有ったのだろう。果たして大河ドラマでは夫婦の不和をどのように表現するのだろうか？

以上